行政視察等報告

（会派　政進クラブ）

＜視察目的＞

・斜面地・空き家活用団体つくる　「つくる邸」
　空き家対策について学ぶため

・長崎県島原振興局農林水産部島原地域普及課　「地域就農支援センター」
　JA 島原雲仙「農援隊・収穫班」など、島原半島の先進的な農業振興の取り組みについて学ぶため

・熊本市街地、南阿蘇村
　震災後 2 年を経過して、熊本城周囲の市街地復興状況及び、阿蘇山付近の復旧、観光の影響等の調査

＜視察概要一覧＞

視察月日	視察・研修先	視察施設	視察内容
平成 30 年 4 月 11 日 (水)	長崎県長崎市 斜面地・空き家活用団体つくる	つくる邸	空き家だった古民家を拠点とした地域づくりについて
平成 30 年 4 月 12 日 (木)	長崎県島原振興局農林水産部島原地域普及課	地域就農支援センター	島原半島の農業振興の取り組みについて
平成 30 年 4 月 13 日 (金)	熊本市 阿蘇郡南阿蘇村	熊本城付近市街地 阿蘇ファームランド	外観視察 施設内見学

＜視察概要報告＞

１．つくる邸

●対応者：斜面地・空き家活用団体つくる　代表　岩本　諭氏

●概　要：空き家であった築 70 年の古民家を改修し、この家を拠点として積極的に地域に入り、若者の視点でまちづくりに取り組んでいる活動状況を伺う。

＜考　察　1＞　田中武夫

岩本氏の説明中で、不動産情報に、空き家状況についての記載（掲載）が無いことからその必要性を感じて行動に移した点。
賃貸借契約としての活用方法のなかで、子ども達の（城）としても利用することや、空き家のメンテナンス方法などを勉強して、希望者に教えていくことで、地域空き家を守る伝統を形成し継承しようとする取り組みに非常に感銘を受けた。
意識―行動―生活―人生を見つめる―地域づくり（景観）をトータルに繋げ空き家の終活をすることの大切さ。安来市に反映したいと思います。

＜考　察　2＞　岩崎　勉

急斜面に住宅が密集し道幅も狭い地域で、虫食いのように空き家が発生しつつある中で、県外から移住した若者たちが中心となり、古くなった住宅を取り壊して新築するのではなく自分たちで修繕し、SNS 等で情報発信を行って仲間を増やし条件不利と思われる斜面地の住宅から景色を楽しんだり、住居兼集会所的な利用方法も行われており、本市の空き家対策においても柔軟な発想が必要だと感じた。

＜考　察　3＞　飯橋由久

つくる邸代表の岩本氏は、大学で斜面地に住む人たちの研究を通してこの地を知り、この地で暮らすことに魅力を感じ、空き家を改築して住むようになったとのこと。
安来市も空き家対策をする上で、空き家にいったいどういった人々に住んでもらうか？このことを考えると、やはり若い人たちに住んでもらうか、又住まなくても彼らに有効活用してもらうのが一番いいと考える。では若い人たちに居住及び活用してもらうには、岩本氏のような若い人が空き家利用に対してＳＮＳ等を使い情報発信等行ってもらわなければならない。安来市も岩本氏の様なバイタリティ溢れる若者を招へいして行政と若い世代が手を組み、空き家対策を講じていく必要性を感じた。

2、島原地域就農支援センター

●対応者：長崎県島原振興局農林水産部島原地域普及課

課長　宮原　孝一氏

係長　中村　徳子氏

係長　竹邊　桂氏

●概　要：・島原半島の農業振興

・産地の強化・育成に係わる労力支援

・フードクラスター協議会の取り組み

※　以上の内容で説明を受ける

＜考　察　1＞　田中武夫

JA 島原・雲仙が農業労働力確保策として行っている（農援隊組織）収獲班による労働支援でのシステムを勉強した。

農特産品目の作業、出荷の計画表作成し、労働力不足補正に役立てるシステムの運用管理の説明。

別途・農政局より生産部会の活動状況を伺い安来市の取り組みに参考としたい。

＜考　察　2＞　岩崎　勉

農援隊と収穫作業班の労力支援をどのように行っているのか大変興味深く話を伺った。農援隊の活動にも感心したが、その結果として毎年 UI ターン者や新卒者を含む新規就農者が 60 名程度いるとのこと。その背景には JA や行政等が地元の島原農業高校等へ出向き農業の魅力を発信し続けているとの話を聞き、安来市も農業教育に力を入れるべきだと強く感じた。

＜考　察　3＞　飯橋由久

ここ島原ではＪＡが率先して独自の「JA 島原雲仙農援隊」を設立され併せて「島原地域雇用労力支援協議会」を設立して地域の農業振興及び、新規就労の普及に努めている。これは新規就労者の獲得や事業承継に大いに役立っているとのことである。

新規就農者が６０名程度いることには非常に驚いた。安来市も新規就農者や事業承継問題に直面しているが、この島原市の政策を大いに学ぶべきと考える。

3、熊本城付近市街地及び阿蘇ファームランド

●概　要：熊本城の復旧工事状況
市街地の復旧状況及び観光客動向
震災後の阿蘇ファームランドにおける観光客の来場状況
※　以上の内容で視察、見学を行う

＜考　察　1＞　田中武夫

地震災害の復興中。地元の思い、早期復興と、従前の生活を取り戻そうとする必死の思いを肌で感じられ。ひとたび、被災すれば経済的な打撃が大きく、復興中には、相当強い意志が必要であると実感した。安来市の災害対策に、反映せねばと痛感した

＜考　察　2＞　岩崎　勉

熊本市は九州新幹線の停車駅があることや、市街地にある重要な観光資源の熊本城が一定程度修復されていた。しかし南阿蘇村に入り阿蘇ファームランドを訪れると、観光客は少なく、話を聞いてみると道路復旧が進まず観光ルートが変わってしまったためお客が来なくなったと伺った。現地では災害復旧工事が現在も行われ、復旧の遅れが観光業に及ぼす影響は大きなものがあると痛感した。

＜考　察　３＞　飯橋由久

震災から丸２年が経ち、熊本城を含む付近の市街地の復旧状況を視察したが、報道で見るより熊本城の被害状況が大きすぎるのに驚いた。観光バスはほとんどなく、城付近にはところどころバリケードが張られ城の観光が出来ない状況である。城の修繕にまだ３０年近くかかるとのことで、気の遠くなるような話である。

また、阿蘇ファームランドは大型健康テーマパークとして建てられたが、震災後の付近の住民の避難施設として別に意味で有名になったところである。ここもところどころ施設が閉鎖中で、改修中であった。観光客も全くいなく。この地から阿蘇の噴火口までの観光ルートは未だ通行止めの状態である。２年たっても未だ目途が立たず、熊本の最大の産業である観光業は大打撃を受けており、観光にかかわる商業が衰退するのが心配である。安来も以前大型地震に見舞われたが、熊本ほどの観光被害がなかったことが不幸中の幸いである。しかし、ひとつの災害が風評被害を生みそれが観光業界に影響を与えるのはよくある話である。今後安来市も防災にむけインフラ等の整備だけでなく、観光被害対策も考えていかなければならないと思う。